

古武術の身体

——柳の風景が象徴するもの——

一、文化における身体

二〇一一年十一月十九日に、台湾の輔仁大学で、「文化における身体」と題する国際シンポジウムが行われた。

台湾、中国、韓国、日本などの研究者が、このテーマをめぐって議論した。台湾は日本語熱が盛んで、二〇一一年現在で、四五の大学に日本語学科を置き、一六の大学に修士課程をもつ。また、東日本大震災の折にも、最も日本を支援した国として知られている。

シンポジウムは、同時通訳がなされ、私は「日本人の身体観—シンボルとしての柳、桜」と題して発表した。その折に研究者らとのデスクッションで得たことなども取り入れながら、本稿をまとめた。

そもそも「文化における身体」というテーマであるが、私はみずからの専門とする日本文学の側からのアプローチはもとより、剣道、及び古武術を修得する過程で考察したこともここに取り入れた。

かつて、剣道をはじめたころ、庭ですぶりをしていると、「身体の古層を耕す」という言葉が浮かんできた。竹刀を振り上げ、振り下ろすという行為をつづけていると、古い身体の記憶が目覚め、それが農耕文化として脈々と続けられた身体所作と、どこかで重なるのではないかという思いがした。

加藤孝男

むろん、農作業での耕すという動きは、腰を低くして、土に鎌を入れるという動きである。これは日本の古武術の動きと、かなり似通った点がある。この「古武術」という言葉は、近年、甲野善紀などの研究者によって、広く知られるところとなっている。

同じ剣を扱う現代剣道とも、古武術の所作は異なるところがある。

現代剣道では、とどまって斬るという引き斬りではなく、押し斬り、または打突が中心である。打ち込むと同時に後ろ足を引きつけ、次の技に備えている。すばやい連続技が必要な現代剣道にとって、不可欠な動きである。

だが古流の動きは、違う。基本的には、ひと太刀で相手を斬るということを想定しているので、剣の動きと同時に、腰を落とし、後ろ足を残してからだを安定させる。下半身をどっしりとして、上半身を柔軟に動かすという古い時代の身体を、よりわかりやすいかたちで今日に残しているのである。

こうした古武術の形については、後に詳しく述べるが、今日、こうした身体の使い方が風化しつつある。それは同じく剣を用いる剣道においても、こうした理念が見えにくくなったということからも分かる。そもそも農業においても、鍬で土を耕すということが、稀になった。機械化がすすみ、トラクターで耕すということが常態化した。

古い時代の身体的所作は、農耕においても継承されず、機械化によ

るハンドル操作に変化した。

このハンドル操作をする身体というものは、車社会の現代を象徴的に表している。ハンドルを握る手と、アクセルやブレーキを操作する足先のみに神経が集中し、からだ全体は働かない。

これは車の運転だけではなく、我々の日々の労働にもいえることである。

現代文明は、「腰掛ける」ということに大きな価値を見いだしてきた。からだで働くということよりも、頭で働くということの方が上位にあると考えられてきたのである。

ところで、頭で働くことが、かたで働くということよりも、ほんとうに上位にある概念なのであろうか。むしろ、からだの機能を高めるといふことからいえば、逆で、からだ全体の働きを尊ぶことの方が、身体にとってより健全である。

腰掛ける形の作業形態は、日本においてもこの百年ほどの間に広まりをみせた。身体のある方が、その思考をも決定するという考え方からすると、現代における知の多くは、このデスク型から生み出され、まぎれもない机上の思考である。

こうしたことは、孔子や仏陀、キリストなどの言葉が、単なる机上のものではなく、行いを通じて弟子に口述され、弟子によって記されたことを思えば、現代的知の問題点があきらかとなる。

しかし、そこまで立論を溯行させるには、あまりに壮大になりすぎるため、ここでは、日本人の身体観の推移によって、こうした現代の身体の問題点を浮彫にしたいと思う。

二、柳と桜の美意識

さて、現代は、デスク型の作業形態によって、手先と足先のみの作業で、労働がなされることが多い。逆に、身体をつかった労働は、嫌

古武術の身体

われる傾向にある。これは文明の発展が、労働の効率化に向かった結果である。

そのため日本人の身体観も大きく変容したのである。農耕によってつくられてきた身体が、どこかで忘れられて、身体的には楽な腰掛けの労働がそれに取って代わった。このことで、現代人の身体は、しばしば支障を来し、多くの現代病を生んでいる。

これは、からだ全体の働きが、座ることによって機能しなくなり、部分の働きが強調されたためである。

古い農耕作業で慣らされたからだは、長年の所作を繰り返す行うことで、からだの機能を高めることができる。そうした作業の記憶が身体の中にインプットされているからである。

こうした古い時代の身体を、どのように現在のわれわれは思い描くべきであらうか。むろん、われわれは、滅びた身体を復元するために、古い形の農作業をたどることはできる。また、武道を鍛錬することで、こうした身体を身につけることができるだろう。

しかし、そうした身体によって得られる知は、言語化することが難しく、第三者にその充足した世界を説明する必要も無い。また、古来より、身体的な技術は、直接習うものにしかその要諦は教えられていなかった。

今日、最先端の科学技術で、武道の世界を解き明かそうという試みが行われているが、武技を習得したものは、解き明かす前にその仕組みを体感しているのである。

こうした体得するものの世界を、理論化することは困難である。が、唯一、比喩やシンボルの機能を用いて、その世界を語ることはできる。それは古くからあるものに仮託された身体で、人間社会をとりまく自然がその象徴となっている。

そうしたシンボルの自然のなかで、もっとよく身体性を表していると思われるのは、柳と桜である。柳は、楊柳などによばれ、楊（カワ

古武術の身体

ヤナギ)と柳(シダレヤナギ)に区別されるが、日本人の身体にしくりくるのは、枝の垂れたシダレヤナギである。

この柳のある風景が、近年減少したのも、日本人の身体観とどこかでつながっている。

逆に、人工的にふえたのが桜であろう。ソメイヨシノとして開発されて、日本のいたるところに根付いている。

この柳と桜は、日本人の身体観をもっともよく表しながら、現代は、柳よりも桜の方に人気が集中している。人の集う公園などに桜が植えられ、春になるとその優美な花は日本人のこころを魅了する。むろん、古くはヤマザクラであったが、人工的に交配されたソメイヨシノが、日本人の「花」となりつつある。

これはいままも現代人が桜を愛しているという事例であるが、今をときめく、AKB48の歌にも「桜の木になろう」(秋元康作詞)というものがある。

(略)

永遠の桜の木になろう

そう僕はここから動かないよ

もし君が心の道に迷っても

愛の場所がわかるように立っている

(略)

というものである。桜のテーマはこれまでにさまざまな角度から詠まれ、殊に和歌の題としては、類型歌も含めて膨大に詠み込まれたのである。そうした自然の景物の代表を「雪月花」といい、それらはいずれもはかない美の象徴として、日本人のこころを捉えてきたが、なかでも桜は別格であった。

本居宣長に、

敷島の大和心を人問はば朝日に匂ふ山桜花

という有名な歌がある。朝日に照り輝く山桜こそ、「大和心」である

といっている。同じ山桜であっても、光線の具合や咲き方によって魅力は異なるが、宣長は、朝日にきらめく山桜を古い日本の心にみたまてた。この歌は、理解しやすいため、戦前・戦中において国家主義を強調する場合によく引き合いに出された。

秋元の詞は、戦前における桜の文化的意味からは切り離されて、卒業の季節の花という月並みな素材を描いたものだ。

その花が落ちてでも大きな枝をひろげて、好きだった人をいつまでもここで待っているという。

こうした桜と比較すると、柳の存在は、はなはだ影が薄い。有名な『古今和歌集』の歌に、

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

素性法師

というものがある。平安京の春は、柳と桜によって彩られていたという。

平安の頃の美意識では、柳は桜と並ぶ春の代表的な景物であったことが分かる。

山本健吉は、『カラー

図説日本大歳時記』の「柳」の項目において

「桜が純日本趣味、梅が大陸趣味であるのに対して、柳は和漢両様の趣味を代表している」と述べている。



名古屋城のお堀端の柳

おそらく柳は、大陸の美観の借用であると思われる。殊に水辺に多く生息する柳は、池や川の風景とあいまって、美しい緑の景観をつくりあげてきた。その柳の風景は、古来より身体のある方の理想型を指し示していたのではなかったか。

「柳腰」といえば、細くてしなやかな女性の腰を表し、「柳髪」といえば、やはり長くてしなやかな女性の髪を表す。

また、「柳に受ける」といえば、逆らわないで受け流すことをいい、柳に風といえば、やはり逆らわず穏やかにあしらうことを意味する。さらに「柳に雪折れ無し」とは、柔軟なものは弱々しく見えても、剛健なものよりもかえって強いという意味だ。

これらは、柳の形状をよくしめし、それが人間の身体性や精神ありかたと深く関わりながらあったことを示している。

三、桜と武士道

一方で、桜は散りぎわの潔さを、人間の行動に重ねあわせて眺められてきたのであった。たとえば、三島由紀夫の辞世の歌。

散るをいとふ世にも人にもさきがけて散るこそ花と吹く小夜嵐

三島は、昭和四五年十一月二五日（旧暦の吉田松陰が刑死した日）に、自衛隊市ヶ谷駐屯地で自決した。日頃通い慣れたこの場所へ楯の会の会員らと訪れ、総監を人質にして、クーデターを起こそうとして、実現せず、自決した。むろん辞世の歌であっても、死に臨んで詠じたというより、あらかじめ死を予測してつくられている。

小説や戯曲にきらびやかな才能を発揮した三島の最期の歌としては、あまりにも月並みである。

「散るをいとふ世」とは、命がもっとも大切なものとなってしまった今の時代をいうのであって、三島はつねに、命以上に大切なものがあると力説していた。

古武術の身体

戦中の軍歌「貴様と俺とは同期の桜、同じ兵学校の庭に咲く。咲いた花なら散るのは覚悟。見事散りましょ、国のため」（「同期の桜」）の歌詞にもみられるように、公のために散らざる得ない時代の美意識が、桜の花に重ねられている。いまも自衛隊の徽章に、桜がつかわれているのは、こうした歴史を背負っているからだ。

自衛隊の市ヶ谷駐屯地に乗り込み、総監を人質にして、隊員たちにクーデターを呼びかけた三島の行動は、最後の檄文に記されている。違憲の軍隊といわれた自衛隊を、正式に憲法に位置づけねばならぬという考えは正しくても、時代がついてこなかったのである。その意味で、机上で組み立てられた論理だった。

日本における左翼革命を阻止するために、三島が私財をなげうってつくった楯の会は、中国の文化大革命が日本に飛び火することを阻止するためのものだった。

だが、左翼による社会転覆の可能性がほぼなくなった一九七〇年の時点において、三島の楯の会は、もう何の意味も持たなくなっていたのだった。三島は、その楯の会を、大義のために動かしたかった。それが憲法改正問題であった。

結句の「吹く小夜嵐」とは、夜半に吹きあれる嵐であるが、それは外部からやってくる危機でなければならない。しかし、そうした危機を三島自身が演出したのである。この辞世の歌は、そのことを明快に語っているように思える。

だれも理解はしない。それは私のなかを吹き荒れる小夜嵐であるからという内容が、この辞世から読み取れるのである。

では、いつ頃から日本人は、桜が散るのを、死の潔さと結びつけるようになったのであろうか。

小川和佑は、「花は桜木、人は武士……」という『仮名手本忠臣蔵』の一節（七〇二年、元禄一五年）を例にして、江戸時代中期頃に、こうした結びつきが生まれたと述べている。この前年に大石内蔵助らが、

古武術の身体

吉良邸に討ち入り、主君の仇を討った事件が起こる。当然、幕府は全員に切腹を命じたのであった。このとき見事に散った彼らを、世間は武士の鑑と讃えたのであった。

その後、忠臣蔵が演じられることで、日本人のなかに桜（山桜）と武士道をつげる考えが生まれたと、小川は『桜文化と日本人』のなかで述べている。

このように桜については多くの日本人が文学作品や芝居などで言及し、文化的にも掘り下げが進んでいる。しかし、柳については、決して多いとはいえない。

柳といえば、日本では、しだれ柳をさすことは、すでに述べたが。むろん近年では、品種の改良が進み、桜にも梅にも「枝垂れ」が増えている。

枝の垂れた桜や梅はあでやかさと同時に、しなやかさを兼ね備えるという美点はある。しかし、旧来の美意識のなかには、緑にしだれる青柳の美観が存在したのであって、それが日本人の身体性とどこかで結びついてきたのであった。

武道の基本的な身体を「上虚下実」と言い表すことがある。上半身の力を抜いて、下半身を充実させることである。

その中心は肚であって、ここが人間の充実感の中心となる。昔の武士が切腹したのは、この肚を斬った。そこが身体のなかでもっとも大切な場所であったからである。この肚は、和服や武道の帯を巻く場所と同じである。これより下が下半身である。

上半身を柔軟にし、下半身をどしりさせるということが、身体的理想型とされてきたのである。それは状況に対応できる柔軟さを意味し、身体的な柔軟性は、思考の柔軟さと対になる。

柳の形状がもっともこの状態に合致していることは、武道流派の名に、柳の文字が多く使われることでも分かる。

だが、ここで注意しなければならないのは、古武術と現代剣道との間

にも隔たりがあることである。明治の文明開化によって、ヨーロッパ式の身体観が輸入され、日本人の所作そのものが大きく様変わりした。その事例としてよく引き合いにだされるのが、歩き方である。古くは「ナンバ」とよばれる右脚と右肩とが同時にでる歩き方が、明治を経て、西洋軍隊式の歩き方へと変更させられたのであった。

こうした事例についてはさらに検討を要するが、右脚と右肩とが同時に出るというナンバの所作は、剣道にかるうじて残されている。しかし、古流兵法にある身体の使い方は、更にみやすい形で古い時代の身体をそこにとどめているのである。

戦後、剣道は危機に瀕した。GHQが、軍国主義を助長したものと見て武道そのものを糾弾したからである。

昭和二十年十一月には、「終戦に伴う体錬科教授要項取扱に関する件」というお触れが出され、学校における武道は、課外も含め全面的に禁止されている。こうした武道を禁止する条項が矢継ぎ早にだされて、武道は継続することが困難な状況に陥っていた。しかし、こうした武道をスポーツとして甦らせる動きがあらわれることで、禁は解かれたのであった。

これ以降、試合で、効率よくポイントを取るための動きが、現代剣道のスタイルになっている。後述するが、唯一、日本剣道形という木刀の型稽古のなかに古い古流の型が残されているのみである。

四、柳生新陰流の身体観

さて、古い時代の身体の使い方が、今日に残されているもののなかで、国家を巻き込んだ兵法として知られているのが、柳生新陰流である。

柳生新陰流は、剣を通して徳川幕藩体制の一端を担った。徳川秀忠、家光の指南役となった柳生宗矩が「天下の剣」として新陰流をひろめ

たからである。將軍や多くの弟子のために、宗矩は多くの兵法書を著さねばならなかった。また宗矩自身、幕府の総目付となって政治にも関与した。

そもそも、柳生一族は、奈良県の柳生の庄を發祥とする。宗矩は、上泉伊勢守から新陰流の允可を受けた柳生宗嚴の五男であった。この宗矩の子孫たちが江戸柳生である。一方、宗嚴の孫にあたる柳生兵庫助とその子孫たちは、尾張柳生と呼ばれる。

江戸柳生が、將軍家の劍術指南役として、新陰流を天下に広めたところと、尾張柳生は、尾張藩の指南役として、新陰流を継承し、その流れを今日に残している。古武道として現代に伝わる柳生新陰流は、尾張藩に伝わり、明治以降は、東京柳生会として継承され、さらに柳生会、転会、春風館などの新陰流の各流派になって今日に至る。

柳生というのは、柳が生えるときく。かつて奈良県の柳生の里には、多くの柳がみられたのであろう。むろん、流派名は、上泉伊勢守のひらいた新陰流を、柳生石舟斎が受け継ぎ、そこに新たな工夫をくわえて成立した。すなわち、上泉の新陰流と、柳生の兵法とが融合すること、柳生新陰流となった。

柳生の剣を、兵法というのは、劍術のみならず古い時代のいくさの術が含まれていたからである。宗矩によってこのいくさの術が、国家平定の術として生まれ変わった。

このことを宗矩は『兵法家伝書』のなかに、「殺人刀」から「活人剣」へということばで示している。戦国の世においては、人を殺す剣であったものが、徳川の世となって、人を活かす剣に変わったという。こうした鮮やかな剣の理念の転換は、もはやいくさそのものが、刀という武器だけでは戦えない時代に突入していたからである。すなわち、いくさの中心は、槍や鉄砲であって、もはや刀は、接近戦で身を守ることに以外には、使えない武器となっていた。

あまつさえ、国は家康によって平定され、平和な時代の剣のあり方

古武術の身体

が模索されていたのである。

日本刀は、あくまでも武士の魂であり、その操作術は、斬り合いで人を殺すことよりも、武士の魂を磨くということに力点がおかれた。後世、「武士道と云ふは死ぬことと見つけたり」という『葉隠』の一節があまりにも有名となり、武士道は、桜花のように死ぬことだという通念がひろまったが、それは武士道の一面であった。

劍技の体系を子細に点検してみれば、死ぬことよりも、身を守ることに置くと、身体哲学としての劍の精神はより深まりをみせる。

宗矩の『兵法家伝書』が、禪の言葉によって書かれた書であるように、新陰流の稽古も、動く禪などよばれる。

その稽古方法は独特な方法をとっている。それぞれが段階に応じて稽古を深め、剣を通して、勝ち負け以上に重要なことを学ぶ。

合撃打ちから無刀取りまで、柳生独自の方法で、劍技の精度を高めていく。

合撃とは、互いに上段に構え、相手から斬りだしてきた剣を、あとから斬り出した剣が、上に乗るようにして勝つという、きわめてシンボリックな技である。

こうした稽古は、現代剣道のように防具をつけず、刀のかわりに、袋竹刀（割られた竹を革で包んだ竹刀）を使う。

これは上泉伊勢守の時代に考案されたといわれ、竹刀と竹刀とを打ち合うとき、心地のいい響きをたてる。木刀による稽古がきわめて危険であったことを思うと、袋竹刀による打ち合いは、思い切った打ち合うことを可能にした。むろん、かつては型稽古のあとに、自由な打ち込み稽古を行っていたが、そのときには防具を着用している。

現在は、柳生新陰流としては、型のみが残されていて、おのずと斬り合いの要諦がつかめるようになっていく。

その太刀使いには、「三学円之太刀」「九箇之太刀」「燕飛之太刀」

古武術の身体

「小転」「天狗抄」などと名称が与えられている。こうした稽古は、剣技の精度もさることながら、まずは下半身の充実と、上半身のしなやかさが強調される。

まさに柳のごとき身体づくりが要求されるのであり、この実践が、八勢法という稽古に残されている。これは柳生独特なもので、別名、水車勢ともいう。



写真のように、竹刀を肩のうしろで回して、そのまま相手に斬り込んでいく。その時の竹刀は、いったん柳の枝のように背後に垂れ下がり、そこから相手へ繰り出される。

刀を枝のように下げる方法は、現代剣道においては、日本剣道型の四本目に痕跡をとどめる。この剣道形は、大正元年に大日本帝国剣道形として制定された。大日本武徳会と東京高等師範学校とが協議して

形がつけられたが、諸流から特徴的な剣技を集めて、集大成されたいわれる。

現在の日本剣道形の四本目は、突いてくる相手の剣を、竹刀を垂らしながら受け流し、左足で斬り込むもので、柳生新陰流の特徴的な足使いもここにみられる。というのは、現代剣道は、右足が前（中段の場合）であるのに対して、柳生の足使いは、右も左も交互に使い、偏るということがない。

こうした柔軟な刀法を、柳生の兵法書ではどのように描いているのか。

柳生新陰流をひらいた柳生石舟斎宗厳が、師の上泉伊勢守の口述を整理して体系化した「新陰流斬相口伝書事」に、その奥義が隠されている。ただし、当時の口伝書類は、あくまでも秘伝として伝えられたもので、箇条書きにされた文言のみからでは、内容を読み取ることは難しい。幸い新陰流二十一世柳生延春が『柳生新陰流道眼』のなかで口伝を公開し、解説をくわえているので参考になる。

柳生の太刀のなかでもっとも秘伝とされるのは、「手字手裏見」である。この技は十文字勝ちともいわれ、相手がどのように斬り込んできても、みずからの中路（真ん中）を斬り込むことによって、相手の柄をもつ手を切り落とし、勝ちを得る技である。敵が、横からでも、下からでも刀を使って斬り込んできても、人中路を切り通すことで勝ちを得ることができるとされる。

これは現代剣道では、封印された技となっている。なぜなら面、胴、小手、喉の部位以外を打つことは危険を伴うからである。

斬りあいとは、ルールのない命のやりとりである。相手は、思いもかけないところから斬り込むこともあるし、体のすべてが攻撃の対象となっている。そのような限定のない斬りあいでは絶対に勝ちを得られない方法こそ秘伝であり、どの流派にもこうした技が存在した。

さて、「新陰流斬相口伝書」では、「手字手裏剣」のあとに、偈が添

えられている。

心随万境転

転処実能幽

随流認得性

無喜亦無憂

という五言絶句である。摩訶羅尊の偈と柳生延春は解説するが、この偈の大意は、次のようなものである。

心というものはあらゆる情況のなかで変化する。その変化はじつに幽かで、深い。こうした流れのなかで、本来の自分をみつけることができる。喜びも憂いもない境地に至ることができる。

千変万化する情況にこころを乱されないこと、これを「風水を聞く」とも表現している。こうした硬直化しない心が、とっさの機先を制する。硬直したら負ける。こうした自在の境地が、命のやりとりという場において求められたのであった。

その場に居着いてしまおうとすることを解放することこそほんとうの極意であった。刻々変わる外部状況に應ずることは、しなやかでなくてはならないのだ。

こうした兵法の考え方は、上泉伊勢守の「影目録」に言う「懸待表裡は一隅を守らず、敵に随って転変して、一重の手段を施す事、恰も風を見て帆を使ひ、兎を見て鷹を放つが如し」という言葉にすでに表れている。

風をみて帆を使い、兎をみて鷹を使うとは、その時その時の情況に應じて手段を講じ、とっさの判断によって相手に対応することである。これは固まった精神からではとうてい発想することができない。

その技は、新陰流の極意とされる無刀取りにも表れている。無刀取りとは、刀で斬り込んでくる相手に、素手で応じる技である。それはどこから切り込んでくるか分からない相手の太刀を、受け手が体を低くすることで、頭上に斬り込ませるのである。あえて、身を低くする

古武術の身体

ことで、頭上への経路を誘導し、相手の懐に飛びこんで太刀を取る。形としては、待っているようにみえながら相手の動きをコントロールしているのである。こうした自在な精神の発露が、身体の柔軟性を通して学ばれていく。

執着を断つということが、仏教精神においても、「無」や「空」という思想を生んでいるように、柳のような柔軟な身体性は、究極の理想と言えよう。

したがへば嵐も弱る柳かな

荒木田守武

戦国時代の連歌師で、俳諧の祖ともいわれた宗武は、柳をこう表現している。嵐が吹いても、柳の木はなびくだけで、一向に折れることはない。それが嵐をも弱らせるという。

この句を用いて武道の極意を説いたのが、如水流の秘歌である。

したがへばあらしもよわる糸柳つよき松には雪折ぞある

今村嘉雄の『武道歌撰集』からの引用である。

あきらかに武道が柳のような身体をつよいものであると考えていることが分かる。いかにもつよそうな松には、雪折れがあるという。

また、「二刀流兵法至極百首」には、

青柳の枝しげけれどおのづから折れぬは風にかつと知るべし

和田与兵衛重郷作と伝えられるが、柳の枝のしなやかさが、どのような逆風にうち勝つという。柳は、むしろ女性的な身体をあらわすと思われているが、そうした柔なるものが、剛を制するという考え方がここにある。

この考え方が、柔術（道）における「柔よく、剛を制する」という考え方につながっている。

五、柳の美の再発見

さて、日本において柳の木が減少していった背景には、護岸工事な

古武術の身体

どによる柳の木の伐採や、柳をめぐる価値観そのものの衰微が考えられる。

いまでも柳の木は存在するが、それを見る側の目が、柳の存在に気づかなくなっているのだ。これは、日本人の美観の変容には違いないが、身体能力の大きな衰退と捉えることができる。

戦後日本において武道が嫌われたのは、戦前・戦中の武道教育への反動と考えられるが、その背後には、GHQの思惑が存在したことも確かだ。武道は、戦後、GHQによって一時期禁止された。禁を解かれた後も、スポーツ剣道としての道を歩まねばならなかった。

こうした国内の事情とは裏腹に、その後、武道はマール・アーツとして世界に普及し、いまや世界のどんな小さな町にも道場が存在するほど世界化した。しかし、発祥の日本では、空洞化がつづいている。

平成二十年には、学習指導要領の改訂が行われて、武道が学校教育のなかに取り入れられるようになった。しかし、これは日本人の身体を劇的に改変するまでには至らないであろう。しかし、一部の篤志家によって、今日も指導されている武道はスポーツ化されたとはいえ、脈々と今日までその道統を伝えてきている。

戦後の日本は、経済成長をするにあたり、重要なものを置き忘れてきた。その典型が身体を伴った精神である。戦後、精神的なものは重視されたが、身体的なものから切り離されることによって脆弱となった。身体から切り離された精神は、よりどころを失って、さ迷いはじめたといえる。

これは教育の現場でも、極端な受験教育と、極端なスポーツ教育とが、教育の頂点のように錯覚されてきた。学校教育における武道は競技に勝つことが重要視され、文武の精神をはぐくむことなど二の次とされた。文は武から離れず、武は文から離れないという精神こそ重要であるのだ。

現代の環境においても硬質なもの、我々の暮らしを包み、当然身体も硬直化したままの状態にある。そこには柳のような柔軟なものの姿は、どこかに追いやられているのである。

長年、農作業を通して、自然と触れあってきた身体が、短期間のうちに大きな変容を迫られていることに、多くの人たちは、もっと危機感を感じていいはずである。

かつて柳生新陰流の術理にふれた私は、その文と武との合致した世界観に驚きをもって接したが、これは、かつてヨーロッパに留学したものが感じた驚きと同質なものであったに違いない。

いま、世界のどの国へいっても、人生観をよりよく変化させるだけの驚きは少ない。しかし、こうした伝統の遺産は、身近にありながら確実に精神そのものを深い場所に導いてくれる。私はこうした伝統にふれることを「内なる留学」と考えている。

春の一時期を彩る桜の花は、いまでも日本人のこころを慰撫する。それはデスクワークによって、バーチャルな世界に向かおうとする現代日本人の姿とどこか重なる。

これに対して、柳を美しいとみるこころは、忘れられた心身のありか気づかせてくれる。こうした柳を美しいとみるこころの復権が、いま求められるのである。

その美観をよりどころとして、現代人は、さらにその先にある、心身の深みに目覚めなければならないだろう。

参考文献

日本思想体系『近世芸道論』（岩波書店、一九七二年）

柳生厳長『正伝 新陰流』（講談社、一九五七年）

柳生延春『新陰流道眼』（島津書房、一九九六年）

清水博『生命知としての場の論理―柳生新陰流に見る共創の理』（中央公論社、一九九六年）

- 斎藤孝『身体感覚を取り戻す』（日本放送出版協会、二〇〇〇年）
- 今村嘉雄『史料 柳生新陰流』（上、下）（新人物往来社、一九九五年）
- 今村嘉雄『武道歌撰集』（第一書房、一九八九年）
- 赤羽根龍夫『徳川將軍と柳生新陰流』（南窓社、一九九九年）
- 加藤純一『柳生新陰流の研究』（文理、二〇〇三年）
- 加藤純一『兵法花伝書に学ぶ』（日本武道館、二〇〇三年）
- 甲野善紀『古武術からの発想』（PHP研究所、二〇〇三年）
- 養老孟司、甲野善紀『古武術の発見』（光文社、二〇〇三年）
- 小川和佑『桜文化と日本人』（竹林館、二〇一一年）
- 『カラー図説日本大歳時記（春）』（講談社、一九八二年）
- 松本徹『三島由紀夫の最期』（文藝春秋、二〇〇〇年）
- 日本武道学会編『剣道を知る事典』（東京堂出版、二〇〇九年）
- 『新編 国歌大観』CD-ROM版（角川書店、二〇〇三年）
- （本学人文学部教授）